

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2015～2017
 課題番号：15K02110
 研究課題名(和文) 美学と弁論術の交叉——コモン・センスを中心に

研究課題名(英文) Chiasmus of Aesthetics and Rhetoric

研究代表者

渡辺 浩司 (watanabe, koji)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50263182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：美学は、弁論術の影響のもとで創建されたが、美学の影響のもとで今度は弁論術が衰退していった。この大きな流れを、コモン・センスという考えかたを中心にして、エクフラシスやイマジネーションといった弁論術のこの術語にも焦点をあてて解明した。美学成立前夜は、弁論術を論理学から切り離す動きがある一方で、弁論術を論理学や哲学の中に取り込もうとする動きもあった。バウムガルテンはコモン・センスを常識という意味で用いていた。マラルメとポーは、言葉と意味の正しい遣い方という伝統的な弁論術のあり方を疑い、意味から切り離された言葉の世界を追求した。こうした言葉だけの世界を求める傾向は現代演劇にも認められる。

研究成果の概要(英文)：This research-project aims to clarify the relationships between Aesthetics and Rhetoric, focusing on the concept of common sense on the one hand, on the terminologies such as ecphrasis, imagination and fancy on the other hand. Before foundation of Aesthetics by Baumgarten, Wolff separated Logics from Rhetoric, while anti-Wolff tried to make Rhetoric a field of Logics and philosophy. Edgar Allan Poe and Stephane Mallard did not think that words signify substances, but that words signify nothing. Novarina, French playwright, invented the new word world that consists of orality and sound of words.

研究分野：文芸学、西洋古典学

キーワード：美学 弁論術 修辞学 レトリック バウムガルテン マイアー コモン・センス 芸術学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2011年から2013年にかけて交付を受けた『基盤研究(C) 弁論術から美学へ-美学成立における古代弁論術の影響』による研究に端を発し、美学と弁論術の関係にまつわる疑問点を解明しようとして企画されたものである。その疑問点とは、

(1)古代ギリシア・ローマの弁論術が美学に与えた影響は、あまり研究されてこなかった。とくにを、美学成立前後の弁論術の影響を考慮に入れて比較検討した研究はほとんどない。

(2)弁論術は、西洋古典学や文学に分野では研究されてきたが、美学や芸術学に分野ではあまり研究されてこなかった。美学・芸術学にとって弁論術は歴史的にどのような役割を果たしていたのか。美学・芸術学の観点から弁論術を研究する必要がある。

(3)美学は弁論術から何を受け継ぎ、何を捨てたのか。この点についてはほとんど研究されてきていない。

2. 研究の目的

本研究は、古代ギリシア・ローマにおいて完成した弁論術が、西洋近代の美学や芸術学に受け継がれていく様子を歴史的ないし理論的に究明する一方で、弁論術と美学や芸術学の相違を理論的に明らかにすることを目的としている。美学は、18世紀半ばにバウムガルテンによって創設されたが、美学成立において弁論術が重要な役割を果たした。しかし、バウムガルテンが創設した美学の起源を、古代ギリシア・ローマの弁論術に求める研究が多い。古代ギリシア・ローマの弁論術の影響がバウムガルテンの美学に認められるのはもちろんではあるが、他方で、18世紀までの弁論術は大きく変化しており、近代の弁論術の影響も考慮に入れなければならない。この点については、世界的にも研究が遅れている。

(1)弁論術が美学や芸術学に与えた影響を明らかにするために、「エクフラシス」とか「ファンタシア」とか「イマジネーション」といった弁論術の術語に焦点をあてて、これら弁論術の術語がどう変化したのかを具体的に明らかにする。

(2)美学・芸術学が弁論術の何を取り入れ、何を捨てたのかを明らかにする。そのさい、コモン・センスという概念を中心に据えるが、コモン・センスという概念以外にも、「優美」とか「フィギュール」という弁論術の重要概念も考慮に入れておく。

(3)芸術に対する考え方が古代から近代にかけて、そして現代においてどのように変化したのか、その契機はどこにあったのかを明らかにする。そのさいに、キリスト教の思想の影響も考慮に入れる。

3. 研究の方法

(1)本研究は、人文社会科学系の研究であり、その基本は、関係資料の収集と資料読解で

ある。

(2)そのさい、研究代表者、研究分担者、研究協力者かは、各自個別に担当の研究をおこなう一方で、一人一人の個別の研究とは別に、年1回の割合で研究会を開催し、研究発表・共同討議をおこなった。

(3)またバウムガルテン哲学そのものについてはバウムガルテンを専門とする松尾大先生に講話をお願いし、共同討議をおこなった。哲学史におけるコモン・センスについて、杉山卓史先生に講話をお願いし、共同討議をおこなった。以上の二つの講話はいずれも講演会形式として開催し、一般に公開した。

(4)交付期間中の個々人の研究分野の担当は以下の通りである。

渡辺浩司(研究代表者):古代弁論術と美学

田之頭一知(研究分担者):弁論術と音楽

伊達立晶(研究分担者):弁論術と文芸

石黒義昭(研究分担者):弁論術と哲学

井上由里子(研究協力者、平成29年度より研究分担者):弁論術と演劇

横道仁志(研究協力者):弁論術と宗教

井奥陽子(研究協力者):弁論術と美学

(5)交付期間中に開催した研究発表・講演会は以下の通りである。

第1回、研究会、2015年9月5日、大阪大学会館

渡辺浩司「美学と弁論術の交叉」

井奥陽子「言語の「力」 ヴォルフ学派の論理学と美学」

第2回、講演会、2015年12月26日、大阪大学会館

松尾大(東京藝術大学教授)「バウムガルテンの『美学』における共通感覚の概念」

第3回、研究会、2016年10月22日、大阪大学待兼山会館

井上由里子「現代演劇のドラマツルギー ヴァレール・ノヴァリナの劇作の射程をめぐって」

田之頭一知「舞踊美学に向けて ベルクソンの優美の概念を手がかりに」

第4回、講演会、2017年3月18日、大阪大学会館

杉山卓史(京都大学大学院文学研究科准教授)「われわれはいかなる種類の共通感覚器官なのか? メルロ＝ポンティ以後のヘルダー/メルロ＝ポンティによるヘルダー」

第5回、研究会、2017年9月9日、大阪大学会館

井奥陽子「ヴォルフ学派における個体とその名前」

横道仁志「美と罰」

第6回、研究会、2017年12月9日、大阪大学待兼山会館

井上由里子「演劇におけるアール・ブリュット概念の拡張可能性 ヴァレール・ノヴァリナの俳優論をめぐって」

伊達立晶「言葉・意味・創造性」

田之頭一知「ポエティウスにおける音楽と永遠 永続する音楽をめぐるスケッチ」

(6)さらに美学成立前後の美学・芸術思想、あるいは哲学について調査するために、マイアー研究会を組織し、美学成立直前の哲学者 G. F. マイアー『あらゆる美しい学の基礎』を精読した。マイアー研究会の開催日は次の通りである。平成 27 年度 4/18、5/16、6/13、8/8 日、9/19、10/31、11/21、12/19、1/23、2/20、3/19 平成 28 年度 4/16、5/14、6/18、7/16、8/20 平成 29 年度 5/28、6/11、7/8、8/5、9/10、10/14、11/12、12/16、12/27、1/6、1/27、1/30、2/16。

4. 研究成果

3 年間に渡る本研究の成果の要旨を記す。本研究の研究組織に入っていない先生方の研究成果についてはお名前を記し、謝意を示す。

(1)弁論術の術語のうち、エクフラスは弁論術の教育課程の一つであるが、後代には、芸術的な技法として、とりわけ文学において必要な表現技法となった。エクフラスは、作品を理解するための重要な要素であるということが分かった。同時に、そもそもエクフラスが作品中のどの箇所に対応するのかは、作品全体の解釈に関わる。エクフラスの箇所は、エクフラスの内部で解釈の問題を抱えるが、他方で、エクフラスの外部との関係でも解釈上の問題を抱える。エクフラスの内と外は、芸術理解に重要な視点となる。

(2)ポエティウスは、『音楽教程』において、音楽の時間を神の永遠の時間になぞられている。永遠性は限りなく変容する現在にこそあり、その変容には、天体の運行と同じような秩序がある。つまりそれは、変容するとともに一定の秩序をたもちつづける。「たえず変化する永遠性」と「常に現前する永遠性」のせめぎ合いとしての現在がある。

(3)マラルメとエドガー・アラン・ポーは、西洋の伝統からかけ離れた考え方をしている。西洋では詩は個々の事物の存在を前提にして、言葉による事物の模倣という考え方がなされている。マラルメやポーは、言葉によってこの俗世を離れた世界を意味しようとしている。弁論術は言葉と事物の対応を固定かし、正しい意味を求めるが、マラルメやポーは正しい意味に拘束されない言葉のありように気がついた。マラルメやポーの詩論は、仏教思想の影響を受けた日本中世の歌論と共通する性格をもっている。

(4)ヴォルフは、論理学と修辞学・文法学を切り離し、後者を等閑視した。反ヴォルフの哲学者は、真実らしことの論理を論理学に組み込み、真実らしさの論理、つまり弁論術を論理学の中の一分野としようとした。また修辞学を哲学によって基礎づけようとする動きもあった。こうした二つの動向が、美学誕生の前のドイツの状況であった。

(5)現代フランスの演劇人であるノヴァリナは、言葉の歴史性を重んじる一方で、多くの造語を作り出して演劇をつくる。そこには、

言葉を道具として使うことはできないという西洋的なキリスト教的な考えが認められると同時に、既成の価値の否定と再生という側面も認められる。

(6)バウムガルテンの『美学』における「共通感覚」(コモン・センス)は、万人に共通に備わった感覚という意味で理解すべきであり、アリストテレスの言うような「共通の感覚対象」をとらえる能力と理解するには無理がある。松尾大先生の研究による。

(7)メルロ＝ポンティエは『知覚の現象学』で、ヘルダーの「われわれは思惟する共通感覚器官である」という言葉を、「われわれは永続する共通感覚器官」である誤引用している。メルロ＝ポンティエは、確かに誤引用しているが、誤解していたわけではなく、思想史上は重要な考えを提示している。杉山卓史先生の研究による。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

伊達立晶、「コウルリッジのイマジネーション論再考—推論の方法論を手がかりに」、査読有り、2016 年 3 月、『人文学』(同志社大学人文学会編)197 号、25-73 頁。

石黒義昭、「《それから》と『それから』—講義における漱石紹介の一例」、査読有り、2015 年 10 月、『研究紀要 平成 27 年』(奈良芸術短期大学編) 15-39 頁。

田之頭一知、「書評 山下尚一著『ジゼル・ブルレ研究—音楽的時間・身体・リズム』」、査読無し、2016 年 3 月、『音楽学』61 号、80-82 頁。

渡辺浩司、「カトルルス「第 64 歌」のエクフラス」、査読有り、2017 年 7 月、『ARTS & MEDIA』第 7 号、56-63 頁。

田之頭一知、「ポエティウス『音楽教程』における音楽観—音楽の三分類と音楽家の規定をめくって」、査読有り、2018 年 3 月、『a+a 美学研究』、136-149 頁。

井上由里子、「演劇とアール・ブリュット—ヴァレール・ノヴァリナの俳優論を中心に」、査読有り、2018 年 3 月、『a+a 美学研究』、104-117 頁。

伊達立晶、「作品制作における個人性とその解消—19 世紀末以降の西洋芸術」、査読有り、2018 年 3 月、『人文学』201 号、25-61 頁。

[学会発表](計 3 件)

Kazutomo, Tanogashira, "Ma" Generating Music: Reconsidering: Reconsidering Toru Takemitsu's Conception of "Ma", The 20th International Congress of Aesthetics 24-24, July 2016 in Seoul, 26th July 2016.

井上由里子、「アール・ブリュットと演劇
ヴァレール・ノヴァリナの演技論を
めぐって」、2017年度日本演劇学会 秋
の研究集会、2017年11月5日、愛媛大
学。

〔図書〕(計4件)

渡辺浩司、岩波書店、『世界の名前』(岩
波書店辞書編集部編)、担当箇所:「名は
体を表す」か?」,2016年3月、10-12頁。
田之頭一知、『美と藝術の扉』、萌書房、
2017年3月、総頁203。

森谷宇一・戸高和宏・伊達立晶・吉田俊
一郎訳、京都大学学術出版会、『クインテ
ィリアヌス 弁論家の教育 4』、2016
年12月。

田之頭一知、晃洋書房、『カルチャー・ミ
ックス』[同志社大学人文科学研究
所研究叢書LII(岡林洋・清瀬みさを編著)]、
担当箇所:「ポエティウスにおける永遠を
めぐって—永遠の時間と悠久の自然の音
楽—」,2018年3月、150-163頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究成果の(8)で記した通り、3年間の研究
成果は冊子体の報告書にまとめ、『平成27
年度~29年度科学研究費補助金(基盤研究
(C))研究成果報告書』として2018年3月に
刊行した。

その目次は以下の通りである。

はじめ 渡辺浩司

論文

「マラルメとポーの詩論と日本の中世歌論」
伊達立晶、5-21頁。

「ヴァレール・ノヴァリナの言語の変遷—
『飛んデモ工房』(1972年)から『名の生贄』
(2015年)まで—」 井上由里子、22-28
頁。

「ブラームス《ピアノ・ソナタ第3番》作品

5への視座—作品解釈のための一つのスケッ
チ—」 田之頭一知、40-51頁。

邦訳

「カトツルルス第64歌」 渡辺浩司訳、
52-65頁。

「G. F. マイアー『あらゆる美しい学の基
礎』」 井奥陽子・石黒義昭・渡辺浩司
訳、66-81頁。

講演会論文

「われわれはいかなる種類の共通感覚器官
なのか? メルロ=ポンティ以後のヘルダ
ー/メルロ=ポンティによるヘルダー」

杉山卓史、82-90頁。

「バウムガルテンの『美学』における共通感
覚の概念」 松尾大、91-101頁。

編集後記 田之頭一知、102頁。

(2)以上の冊子体の報告書は、本研究の研究成
果を社会・国民に発信するために、大阪大学
附属図書館のリポジット制度を活用し、執筆
者の了解がとれた論文を順次電子化して公
開していく。

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡辺 浩司(WATANABE, Koji)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号:50263182

(2)研究分担者

田之頭 一知(TANOGASHIRA, Kazutomo)
大阪芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号:40278560

伊達 立晶(DATE, Tatsuaki)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号:30411052

石黒 義昭(ISHIGURO, Yoshiaki)

大阪歯科大学・歯学部・非常勤講師

研究者番号:40522785

井上 由里子(INOUE, Yuriko)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・講師

研究者番号:70601037

(平成29年度より)

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

井上 由里子(INOUE, Yuriko)

立命館大学・非常勤講師

(平成28年度まで)

横道 仁志(YOKOMICHI, Hitoshi)

日本学術振興会特別研究員

井奥 陽子(IOKU, Youko)

東京芸術大学・大学院生